

エジプト王と蛇の姫

これは紀元前 1000 年頃のお話・・・

西日に煌めくナイル川、その畔にあるルクソール神殿とファラオの住む宮殿が交易船で行き交うテーベの街を見下ろしていた。

エジプトの川や木々、動物たちの自然の風景を赤や緑の原色で鮮やかに描いた部屋を壁の松明が照らし、ファラオは、妃となるアシェンドラの手を取った。ファラオは、15 歳になる少年で、金と紺色のボーダーの頭巾を被り、赤く焼けた肌、濃い黒い眉、煌めくスカラベの様な黒い瞳、高い鼻に細い顎、青く染められた麻のローブから延びる腕は女性の様に細かった。傍に立つのは漆黒の肌に生糸の様に流れる銀色の長い髪、灰色の瞳、銀色のドレスに身を包んだ年上の妃、アシェンドラだ。

「陛下、ご心配は無用ですわ。私が側におります。」

「ああ・・・」

ファラオは、眉を下げて微笑むと、真紅の幕を開け、各国の首脳達の集う広間に出た。

二人の横に、大司祭であるアメンホテプが何処からともなく現れ、ファラオに並んで歩いた。分厚い唇に長く伸びた黒い髭、ソテツの葉の様に伸びた濃い^{まゆ}眉の下で真っ黒な瞳を覗かせる彼は、頭頂部をそり上げ、後ろ髪を延ばし、黒のローブに朱色の帯を

締めている。

「明日は陛下の即位式、お妃さまもお迎えし、いよいよアメン・ラーの祝福をお受けになります。もっと胸を張って、皆に威厳^{いげん}を見せるのです。」

「ああ、分かっておる・・・」

ファラオは、アメンホテプの言葉にアシェンドラの手を握りしめた。

「アメン・ラーの祝福の儀を受けられてこそ、真のファラオとなります。さすれば、天を操ることも意のままとなりましょう。直ぐに豊穰^{ほうじょう}の儀へと移りますぞ。」

アメンホテプは、パピルスの書簡を読み上げながら、ファラオを会食の席まで先導して歩いた。

テーブルには、ウズラの丸焼きや、パン、ブドウや無花果などが山と盛られ、国中から集められた音楽隊は美しい音色を奏でてその会食を優雅に演出した。

「皆、よく集まってくれた。其方らの国と我が国との繁栄を心から望もう。今夜は、ゆっくりと楽しんでいってくれ。」

ファラオはそう告げると、アシェンドラと共に、各国の首脳達と杯を交わしながら挨拶をして回った。その姿を見ながら、音楽隊の笛吹の男が、毒矢を笛先に仕込み、ファラオへと向けた。

アシェンドラは、笛吹の男の不審な挙動を目にすると、ファラオを庇い、首筋に毒矢を受けて倒れ込んだ。

「アシェンドラ？そんな……。アシェンドラ！アシェンドラ！」

ファラオは床に倒れ込む彼女を抱え、首に刺さった毒矢を抜き、叫んだ。

「衛兵！そやつを捕まえろ！」

アメンホテプが、笛吹の男を指さし、叫んだ。

「早く、医者を！お願いだ。逝かないでくれ……。アシェンドラ！」

ファラオの悲痛な叫びが、静まり返った会場に木霊した。

プリンセス・アテナ

同刻、ギリシア国家アテナイの 17 歳になる王女アテナは、エーゲ海を見渡す丘の上に立つ巨大な石柱で支えられた宮殿の裏口にある木の扉を開けると、石レンガで築かれた城壁沿いにある階段を駆け下り、城下町の鍛冶屋街に辿り着くと、鉄を打つ男たちの歌声に耳を傾けた。

♪ 俺達の鉄は

♪ どんな敵も

♪ 退ける

♪ どんな敵も

♪ 敵わない

♪ 打て

♪ 打て

♪ 俺たちの鉄は

♪ 富を呼ぶ

♪ ギリシアは美しい都

♪ アテナイの神よ、万歳

♪ 我らの姫君は、女神そのもの

♪ アテナ姫、万歳

「やあ、姫様、今日も海にお出かけかい？」

「気を付けるんだよ！」

ウェーブのかかった長い金色の髪、海のように深く澄んだ瞳^{ひとみ}、砂浜のように白い肌のアテナは、男たちに微笑み、手を振って挨拶をすると、鍛冶屋街を通り抜け、浜を駆け、ショールを脱ぎ捨てると、そのまま海に飛び込んだ。

サファイアの如く碧く澄んだ海で、アテナはイルカの歓迎^{かんげい}を受け、色とりどりの魚たちに囲まれた後、海亀に寄り添って泳いだ。

アテナが、砂だらけのサンダルを脱ぎ、濡れた裸足で裏口から城に戻ると、侍女がすぐに駆け寄ってきた。

「まあ、なんてお姿！陛下がお探しですよ！さあ、お早く！」

アテナは、侍女にドレスに着替えさせられると、謁見の間で王の前でお辞儀^{じぎ}をして
ひざまずいた。若い王は、海を描いた青い壁画を背後に、黄金の玉座に鎮座していた。

「おお、待ちかねたぞ、アテナよ。」

王は立ち上がり、アテナを抱擁した。

「人払いを・・・」

王の命に衛兵が会釈をして、退室した。

「実は、・・・お前にはエジプトに嫁いで貰いたい。」

「えっ・・・！」

「驚くのも無理はない。まあ、聞いてくれ。エジプトの王は、妃を亡くし今は喪に服しておるそうだ。丁度、お前も年頃で、相手も伴侶を亡くした所だ。彼を支え、我が国との友好の懸け橋となってもらいたい。」

「それは・・・、急なことで・・・」

「そうだな・・・。エジプトの王には申し訳ないが、これはチャンスでもあるのだ。

向こうも新しい王妃を迎えれば、此度の凶兆を払拭し、^{まつりごと}政も進められると言うてくれておる。」

「はい、兄様・・・」

「おお、わかってくれるか。」

「兄様のご決定であるのであれば、そのように。」

「感謝するぞ、アテナ。これで我がギリシアの統一に^{はげ}励めるというものだ・・・」

アテナは自室に戻ると、ベッドに突っ伏した。しばらくして彼女は、^{あおむ}仰向けになって天井を見つめると、窓辺に向って歩きだした。

- ♪ 友達もいない
- ♪ 心の内を明かせるのは
- ♪ 海の友達だけ
- ♪ お城の私は
- ♪ ただの着せ替え人形
- ♪ まだ見ぬ旦那様は
- ♪ 私とお話しをしてくれるかしら？
- ♪ 一緒に暮らせるのかしら？
- ♪ 男の人は優しいの？
- ♪ それとも怖い？
- ♪ できる事ならこれからもずっと笑って暮らしたい

アテナの下に、額に赤丸の印のあるスズメが飛んできて囀った。

「まあ、あなたはだあれ？わたしとお友達になってくれるの？」

「ちゅん」

スズメはアテナに応じると、頭の周りを旋回した。

「ふふふ、よろしく。スズメさん。」

アテナは、国王である兄と抱擁を交わすと従者と共に城を出発した。

エジプトの港で、ラクダに荷物を載せる従者と、ラクダの背から落ちそうになるアテナを、縦長の^{ひとみ}瞳で水晶から^{のぞ}覗く魔女がいた。無数の蛇が、彼女の頭を髪のように^{おお}覆っている。

「そうはさせないよ……。ファラオは私だけの物だ……」

職人ロイ

エジプトの石工職人ロイがタガネと金槌^{かなづち}で彫刻をしていた。癖のある栗色の髪、身の丈は180 c mを超え、石運びで鍛えた腕^{きた}はガゼルの脚の様にたくましい。しかし、彼の彫る女性像はまるで男性の様な骨格で、お世辞にも美しいとは言えなかった。

「お前の腕は町一番なのに、女性像となると、てんで駄目だ。おかげで王妃様の墓の仕事は他所^{よそ}に取られちゃったよ。」

親方は大きなため息をつく、ロイを横目に通り過ぎ、ぼやいた。

ロイは彫りかけた女性像に頭を振り一瞥^{いちべつ}をくれると、鼻歌混じりに実物と見紛^{みまが}う鷹の石像を彫り上げた。

♪ 分からない

♪ 女性の事が

♪ どんな物でも彫れるのに

ロイは、猫、犬、ワシ、牛を見事に彫り上げていく。

♪ でも、女性だけは

♪ 目の前にいても、分からない

♪ 見ないでくれ

♪ そんな目で

♪ どんな気持ちで

♪ そんな表情に？

彼は、流し目の筋肉質の女性像を彫ってしまっていた。

その横には立派な男性の英雄像が並び、ロイは首を横に振り、ため息を吐いた。

♪ 違う

♪ 何かが違う

♪ 分からない

♪ 女性の事が

♪ そのドレスの下は

♪ 男と何が違うのか

「馬鹿野郎！ゴミばかり増やしゃがって！お前のせいで石が台無しだ！代わりの石は

お前が取ってくるんだ！」

親方がロイの気味の悪い石像達を見て、怒鳴り声をあげた。

「はい、親方・・・」

ロイは、木製の大きなそりを引きながら村を出て、広がる砂漠へと足を運んだ。

ロイが辿り着いた岩壁から石を切り出し、そりに載せて引いていると、鼠色の雲が空を覆い、雷鳴と共に強風がロイを襲った。

「まずい、砂嵐だ！なんで、こんな突然・・・」

ロイは、日よけのローブを荷台から取り出すと、そりを置いて一目散に駆け出した。

山ほども高くなった砂の壁が、ロイを背後から追いかけてきた。ロイはローブで顔を覆うと、砂の壁の前を全力で駆けた。

その時、前方で足を取られているラクダと人々が見えた。ラクダの体は半分も砂に埋もれ、人々も次々に流砂に飲まれていく。老人の従者がアテナを懸命にラクダの背に押し上げている。

「大変だ！」

ロイが方向転換し、アテナに追いついた時、彼女を載せたラクダは悲鳴を上げて砂の中に引き込まれ、老人の従者も肩から下は既に砂に飲み込まれていた。

「姫様を！頼む！」

老人が叫んだ。

ロイは、ラクダのこぶに飛び乗ると、アテナを抱えて、老人を見た。老人は間もなく

砂の中へと消えて行った。

「爺^{じい}！」

「うおおおお！」

ロイはアテナを流砂の向こうに軽々と投げ、足を止めれば飲み込まれる流砂から足を引き抜き、砂を掻^かき分け泳ぎながらアテナの元に転がり込んだ。ロイは、ローブを広げてアテナに覆^{おお}い被^かさると、台風のような砂嵐に飲み込まれていった。

一面の砂漠、砂がもこもこと動き出した。

「ぶわあ！」

ロイが息を大きく吸うと、咳き込みながら顔を上げた。

「あの子は?!」

ロイが視線を落とすと、太陽に輝く金色の髪と真っ白な肌が自分の胸元にあった。ロイは時が経つのも忘れて彼女を眺めていた。

「コホッ・・・」

アテナが目を開けると、分厚い筋肉の胸板が目の前にあった。

『わあ!』二人は同時に飛びあがった。アテナの頭突きを顎^{あご}に貰ったロイは、仰向けにひっくり返り、もんどりをうった。

「ああ、皆、いなくなってしまったのね・・・」

アテナは、砂の上に座り込み、周りを見渡すと、しくしくと泣き出した。ロイは顎^{あご}を押さえながら、アテナの前に座り込んだ。

「らいじょうぶかい・・・？本当に危なかった・・・」

「え、ああ。ごめんなさい、助けてもらったのに・・・まァ！」

唇から血を出しているロイにアテナが手を添えた。

「ごめんなさい！大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だけど・・・」

ロイはじっとアテナを見詰める。

「あの、なにか？」

「いや、はは・・・、君は天使かなにかなの？」

「え？」

「いや、体は羽の様に軽いし、それに・・・」

ロイは言葉に詰まる。

「いい匂いだ。」

「いい匂い？」

アテナが眉^{まゆ}をひそめる。

「いや、違うんだ。見たこともないくらい美しくて・・・、その、まるで花みたいだ
なって・・・」

「え、あ…、ありがとう。あなたも^{よろい}鎧みたいな体をしてるのね・・・我が国の兵士みたい。何をしているの？」

「彫刻家なんだ。親方にこき使われて石を運んでるから、ほらこの通り！」

ロイが腕と胸の筋肉を見せる様にポーズをとると、アテナがケラケラと笑い出した。

「どうかした？変だったかな？」

「わ、分からない。あなたと話してホッとしちゃったのかも・・・とても怖かったから。」

アテナは涙を拭きながら答えた。

「僕も怖かったよ。あんなに走ったのは生まれて初めてだ。そうだ、ところで、どこに行くつもりだったの？」

「王都へ。私、ファラオのお^{きさき}妃になるの・・・」

ロイの顔は青ざめ、慌てて^{ひざまず}跪いた。

「そういえば、お姫様と・・・！大変失礼致しました！」

ロイは深々と頭を下げる。

「やめてください、あなたは命の恩人です。出来れば、その、お友達になって欲しいのだけど・・・」

「ちゅん！」

「まあ、よかった！あなたも無事だったのね！」

アテナはスズメにキスをした。スズメはグニャグニャとアテナの手の中に沈み込んだ。

「私には今、この子しかいないの・・・、それに爺や、お兄様のお仲間も失って・・・、お願い・・・」

泣き崩れるアテナに、ロイは戸惑いながら彼女の肩に手を置き、^{うなづ}頷いた。

「分かった。僕が都まで連れて行くよ。僕の名前はロイ、よろしくお姫様。」

「アテナよ。ロイ、よろしくね。」

ロイは、アテナを持ち上げて石の上に載せると、そりを引き始めた。

「ねえ、アテナ、君の故郷の話を聞かせてよ。」

「いいわ。」

アテナは子供の頃と故郷の事を歌い聞かせた。

♪ 私の国は、青い空と青い海に囲まれた

♪ ギリシアの国アテナイ

♪ やさしいお父様は戦争で亡くなり

♪ 兄様が私を育ててくれた

♪ お兄様はお仕事で忙しく

♪ 昔みたいに遊んでくれなくなった

♪ ちゃんばらや、蹴鞠^{けまり}

♪ いっしょに泳いだりもしたわ

♪ サファイアの中にいるような

♪ 空の中にいるような

♪ 美しい海

♪ 心を通わせることが出来たのは

♪ イルカやお魚さんたちだけ

♪ お城の皆は、私の心配はしてくれたけど

♪ 私の話なんて上の空

「それは寂しいな。でも君の国はとっても綺麗なんだね。」

アテナが頷^{うなづ}く。

「でも、僕も同じようなもんさ。」

ロイも次いで歌い聞かせた。

♪ ナイルの氾濫^{はんらん}で両親を失った僕を

♪ 拾ってくれたのは親方

♪ 周りは筋骨隆々^{きんこつりゅうりゅう}の兄弟子だけ！

- ♪ 僕も話し相手は石像だけさ
- ♪ 親方は無口だけど
- ♪ 僕をいつも見守ってくれる
- ♪ 彼はいつも僕に言う
- ♪ 思い切り好きなことをやれ、と
- ♪ それだけさ
- ♪ とても怖いけど
- ♪ とても口は悪いけど
- ♪ いつも見守ってくれる
- ♪ 僕は今や村で一番の彫刻家
- ♪ 神殿の石像！
- ♪ 王墓のレリーフ！
- ♪ それが僕の仕事
- ♪ 話し相手は石像だけさ
- ♪ 男は無口
- ♪ 女は逃げ出す（女性たちはロイを見てキャーと悲鳴を上げて柱の陰に隠れる）
- ♪ 話し相手は石像だけさ

ロイが星空の下、そりにアテナと石を積んで砂漠を歩む姿を、再び魔女が水晶で覗いていた。

「しぶとい雌猫だね・・・」

魔女は水晶に黒い布をかぶせると、立ち上がった。

「こうなったら、私が王都に出向くしかないね・・・」

蛇の髪たちが興奮して話し始めた。

「やった、久しぶりのお出かけだ！」

「^{ほこり}埃 臭いここから出られるぞ！」

「ねえ、ねずみ食べれるかなっ？」

「うるさいね、静かにおしっ！」

魔女が地面に向けて手を払うと、魔法陣が現れた。魔女がその陣の中に立つと、赤いオーラが彼女を包んだ。

「愛しい我が君、待っていらして・・・」

魔女は^{ぶどうしゅ}葡萄酒色のローブを頭から被り、神殿を後にした。